※「館報ちくま」及び「もっと知りたいふるさと」は千曲市ホームページでご覧になれます。

もっと知りたいふるさと 99

「更級里」と刻まれた諏訪社

「さらしな」の地名に古来どれだけたくさんの人が心引かれてきたか調べ、約25年になります。江戸幕末生まれの佐良志奈神社（千曲市若宮）の宮司豊城直友さん（1815～1879）もそのことに関心を持ち、神社を発展させました。今は新しい祠（ほこら）に再建されましたが、分社の諏訪社の台座に直友さんが刻んだ文字「更級里」に、激動の幕末と明治を生きた直友さんの心持ちを感じたことがあります。

諏訪社は御柱祭が行われるので、氏子である千曲市の若宮、芝原区の人にとってはなじみがあります。山のある若宮、芝原両区からそれぞれ1本ずつ伐り出し、みんなで引き回し、諏訪社の両脇に建てます。小さな社ですが、祠の裏面の刻字を見ると、直友さんが幕末の嘉永7（1854）年に再建したことが分かり、その台座には「更級里若宮村」と刻まれていました。

豊城直友さん肖像画

私は特に台座に刻まれた「更級里若宮村」の文字に興味を持ちました。「更級郡」ではなく「更級里」。いまでこそ行政区名ではなく「○○の里」と書くのは一般的ですが、江戸時代です。「更級里」の方が、身近で親しみがあると考えたからではないでしょうか。

直友さんの時代にも御柱祭がありました。老若男女が集まる諏訪の神様の住まいだから、この文字を刻めば「さらしなの里」のイメージがより浸透し、定着するという願いがあったように思うのです。

ではなぜ、直友さんはそのようなことをしたのか。『戸倉町誌』によると、天保7（1836）年、直友さんが21歳のとき、近隣の八幡村（現千曲市）の八幡宮が延喜式内社の「武水別神社」と名乗るようになりました。「延喜式」とは、平安時代の各地の神社名を記した公文書のことで、延喜式内社とは朝廷に認められた由緒ある神社のことをいいます。

佐良志奈神社という名前も延喜式内社の一つですが、最初からそう名乗っていたわけではないようです。豊城家の古文書で「佐良志奈神社」と記すようになるのは1700年代半ばからで、以降はそれまでの「八幡宮」の呼び名と混在し、直友さんの生まれた1815年以降はすべて佐良志奈神社です。

2004年の御柱祭
左下に直友さん再建の諏訪社が見える

2004年当時の諏訪社の台座
「更級里若宮村」と刻まれていた

直友さんが自分の神社の名前を強烈に意識するきっかけが、嘉永6（1853）年開国を迫る米国のペリーの浦賀来航ではないかと思います。その翌年に直友さんは諏訪社を「再建」しているのです。当時は日本の独自性を探求する国学が盛んだったので、直友さんも自分の神社の独自性について考え「更級里」と刻んだのではないでしょうか。

そして直友さんは諏訪社再建から7年後の文久元（1861）年、佐良志奈神社の文字を刻んだ大きな社標を境内入り口に建立します（詳しくは「もっと知りたいふるさと32号「さらしなは〝地名遺産〟」を参照）。

直友さんは明治維新12年後の1879年に亡くなりました。直友さんは幕末から明治にかけ自分の仕える神社が都人らの大きな憧れであり続けた「更級」にあることを、地域内外にアピールする仕事に取り組んだのです。

残念ながら、直友さん再建の諏訪社の祠は風化が激しく、2005年、新しい祠に建て直されました。直友さんの祠は側面にブドウの実やリスの模様が彫られており、デザインや遊び心に富むもので、今も新祠の後ろに置かれています。いずれ境内の土になります。「更級里」が刻まれた台座は、現在はありません。

さらしな堂（芝原）
大谷　善邦

編集後記

8月になると、お盆や夏休みがあり、子どもたちにとっては大いに楽しみな時期を迎えます。私が子どもの頃は、親は畑仕事が忙しく、休みともなればよく手伝わされたことを思い出します。

その頃の子どもたちはというと、6年生を中心に近所の仲間で山へクワガタを採りに行ったり、池で魚を取ったり、グラウンドで野球をしたりして、帰りが遅くなると親に叱られたことを思い出します。

また、子ども心で、何が危ないか、何をしてはいけないかは身体で覚えていきました。

近頃の子どもたちは、休みは家の中で、テレビゲームやスマホに夢中になっていると聞きます。それも時代の流れで仕方ないと思いますが、子どもたちで野外での楽しい遊びを考え、そして行動する、それを周りの大人が見守る、それが子どもの自立心、自主性、協調性、判断力を生み、大人になってから、社会生活を送るときに役立つのではないでしょうか。

（稲荷山　T）

発行／千曲市公民館運営協議会　編集／千曲市公民館館報編集委員会　電話026－272－0234　FAX026－272－7167　印刷／㈲ナガト印刷